

十九日の広島女兒殺害事件の第五回公判で、木下あいりちゃんの父建一さんが読み上げた意見陳述書の要旨は次の通り。

あいりは、私たちの実家がある熊本県で生まれました。昨年8月に移り住んだのが、現在の広島市です。また新たな気持ちで、家族みんなで力を合わせて頑張っていくことを決意し、特にあいりに対しては、「また、たくさんのお友達ができるように頑張ろうね」と、励ましていました。

あいりは、絵を描いたり、歌を歌ったりするのが好きで、中でも絵を描くのが得意だったので、毎日のように、その日の出来事などを描いては私たちにを見せて、何を描いたのかを、得意げに話してくれていました。

引っ越す前の昨年7月、東京近郊のレジャーランドに、私とあいりと弟の3人で遊びに行く途中、渋滞中の首都高道路上で、突然、弟が鼻血を出したことがあります。当時、私は運転中で対応ができず、あいりに対して、「お父さんの代わりに、弟の鼻を押さえておいてくれ」と頼むと、弟をあおむけに寝かせ鼻をしっかり押さえて、大声で泣きながら「死なないで」と何度も繰り返し必死で看病してくれました。

また平成16(2004)年12月に起きたスマトラ島西方沖大規模震災の際には、自分のお小遣いのすべてと宝物のサイコロやビーズを被災者の子どもたちのためにと、寄付したこともありました。

そして、一生忘れることのできない、昨年11月22日の火曜日、事件は起きました。いつもと同じように、朝食を済ませるとあいりは、元気よく「行ってきます」と言って、登校して行きました。

小学校から家までは2キロぐらいの距離があり、子供の足で約30分ぐらいかけて、登下校しなければなりません。当然、登下校時以外でも、知らない人に声をかけられても決してついて行かないように厳しく指導していました。

ところが、転校してきて間もないせいか、まだ友達が少なく、この日だけは、誰も一緒に帰ってくれる人がいなくて、仕方なしに一人で家に帰ることになったようです。

帰宅時間になっても帰りが遅い娘に、不安を感じた妻は、自転車で通学路を捜し回りましたがどこにもいませんでした。学校に連絡を取ると「すでに帰りました」との返事があり、不安を抱きながらも、家で、娘が無事に帰宅するのを祈りながら待ち続けていました。

その後、しばらくしてから警察官が家に来られ「娘さんが病院に運ばれています」と告げられた瞬間に、なんらかの事故に遭っていることに間違いないと思い、勤務中であつた私に連絡をとり、命だけは無事であつてほしいと、願いながらお互いに病院へ向かいました。

しかし、願いもむなしく、目を開けたまま横になっていた娘は、すでに、亡くなっていました。この時、「数時間前に、通学路の近くで、すでに死体となって発見されました」と言われ、目の前は真っ暗になり、全身の力が抜けて、地獄に突き落とされた思いでした。その後、警察から事件の説明を受け、娘のあいりは、下校途中に殺害され、段ボール箱に入れられて、放置してあつたことを知りました。

きっと、あいりにとっては、いつも通っていた通学路に殺人鬼がいるとは、想像もできなかったでしょう。おそ

らくこの時、犯人に声をかけられ、言葉が違う外国人だったので、少し英語が話せたあいりは、何か困っているのかもしれないと思って近寄り、口車に乗ったのでしょう。

あいりはこの場から逃げようと思い、必死で抵抗し、泣きながら私たち両親に助けを求めていたに違いありません。きっと、「なぜ、私が、こんな事をされなければいけないの」と、ひどく悲しみ、悔しがり、何がなんだか分からないまま死んでいったのでしょう。

あいりは、私たちにとって自分の命よりも大切な宝物で、生きがいであり希望でもありました。

5歳になったばかりの息子には、あいりの死のことについては「星になって遠くに行ってしまったから、もう二度と会うことができないんだよ」と話しています。本人はどれだけ理解しているか分かりませんが、テレビのニュースなどであいりの事件や子どもたちを狙った事件を見るたびに、ひどく興奮します。今後、息子の心にどのような影響を及ぼすことになるかが不安で、将来が心配になります。

事件後に幼稚園などで描く絵には、あいりの星ばかり描いています。家では、一人で遊ぶときにあいりが使っていたおもちゃなどを見つけては、「これ、あいちゃんが使っていたの」と言って私たちに持ってきます。

4月10日はあいりの誕生日でしたが、娘が生きていたら今年で8歳になり、この日は、きっと妻や弟と一緒にケーキを作り家族みんなで誕生日を祝い楽しいひとときを過ごしていたことだろうと思うと、この日は、今まで以上につらい一日になりました。

残忍な殺し方をしていながら、いまだに殺意を認めず「悪魔の責任」にして無罪を叫ぶ犯人の発言や態度に憤りを感じるとともに、何も悪いことをしていない幼い子供を平気で暴行し殺すような人間を絶対に許すことができません。昨日、犯人は「女の子」から声をかけてきたと証言しましたが、先ほど申しましたとおり、私や妻は日ごろから「知らない人に声をかけられても決してついて行ってはいけない」と、話していましたが、あいりもよく理解しておりました。私は、あいりが自分から知らない男に声をかけることは絶対にあり得ないと断言します。

境遇は境遇として、そして、7年しか生きられないものとして、もう一度あいりを自分たちの子として望むかと聞かれれば、私たちは、望むと答えるでしょう。あいりは私たちにとって何よりも大切な娘でした。犯人が子を持つ親として、あいりに少しでも申し訳なさを感じているのであれば、本当のことを正直に話して刑に服してもらいたい。もし、本当に自分の心に悪魔が入り込み、他人を暴行し殺す恐れのある殺人鬼と自覚しているのであれば、自ら命を絶って、これ以上犠牲者を出さないようにしてほしいと心の底から願います。あいりの死を無駄にしないためにも、このような犯罪が二度と起きることがないように、また私たちのような悲しい思いをする人が現れることがないように、反省の色すら見せない「ホセ・マヌエル・トレス・ヤギ」に対し極刑を望みます。

そして現在、子供たちを狙った凶悪犯罪は、後を絶ちませんが、無力で純粋な子供たちがこれ以上犯罪に遭わないような世の中になることを、私たちは心から願ってやみません。